
勇者と魔王SS～活動報告小話集 2～

ゆずはらしの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と魔王SS（活動報告小話集2）

【Nコード】

N1044BA

【作者名】

ゆずはらしの

【あらすじ】

2012年度、新年の福袋的小話集。活動報告と、ブログ、アトリエゆずはらでちょこちょこ書いていたSS。

基本的におバカさんな話。

警告タグの「残酷な描写あり」が一瞬、「残念な描写あり」に見えた。それだったら堂々とするだけだな。

＊ ＊ ＊

ごく普通の女子高生、神山透子はある日、異世界に勇者として召喚される……魔王を倒せと、荒野に放り出されるのだが。

唐突に。

目の前には、超絶美形。

漆黒の髪に深紅の瞳、着る人を選ぶだろうデコラティブな衣装を
あつさりと着こなし、気品すら漂わせている。うわ、足長っ。腰の
位置、高っ。

ごてごて飾りがついたマントをひるがえし、かつん、かつん、と
ブーツの音を響かせながら、階段を降りてくる。なんの番組。なん
の映画。似合いすぎだろう。決まりすぎてて厭味っぽいぞ。

ちよっとアレだけどね。頭にねじくれた角あるけどね。背中に真
っ黒な羽あるけどね。触ったら痛そうな、爪が長く伸びてるけどね！

あたしの目の前まで来ると、超絶美形はにこりともせずはこちら
を睥睨し、言った。
へいげい

「そなたがこたび、召喚されし勇者か……よくぞ、この城までたど
りついた」

「他力本願な王様始め、この世界の住人には、えらいメーワクした
わ」

伝説の聖剣とやらを構えながら、あたしは言った。

「フツ―の女子高生呼び出して、世界の為に働けて、何なわけ？
何様？ この世界の事は、この世界の人間がどうにかするもので
しょうが！

こんななまくら一本で、右も左もわからない人間を城からほうり出すって、やる気ないにも程があるでしょ！

国民死なせたらバッシングあるから、異世界から勇者呼び出して戦わせてるって、思い切り言いやがったわよ、あのクサレ王！」

それなりに美形だったが、やる気のなさが丸わかりの祝福をおぎなりにされ、城から追い出された。予算もないとかで、持たされたものは、この聖剣の他には、服が一式と三日分の食糧だけ。

おかげで魔王城のある荒野にたどり着くまで、アルバイトをしなから食いつなぐしかなかった。

「皿洗いと踊り子が本業になりかけたわよ、おかげで！」

バレエを習っていて良かった。

「その境遇には同情するが……、ここまで来たという事は、吾と戦う意思ありと見て良いか」

「ああ、まあ、あんたには恨みはないけどね！ 変な首輪つけられちゃってさ、あんたと戦って倒さないと、あたしが死ぬらしいのよ」

あたしは自分の首を示した。クサレ王と腹黒神官があたしにつけた、黒い首輪がそこにあった。

魔王を倒すか、あたしが死ぬかしないと外れない。そして、一年の期限が過ぎると、自動的にあたしの首を絞めて命を奪う。

こんな、もろに呪いのアイテムで枷をつけないと安心できないなんて、どれだけ他の勇者に反逆されてきたんだ。その勇者たちの気持ちわかるけど！

「死にたくないから、ここまで来たわ」

逃げ出す事すらできないから。

魔王は、あたしを見つめ、ふうと息をついた。

「まこと、愚かしい行いを繰り返すな、人の国の王とその取り巻きは。」

哀れとは思うが、勇者よ。吾も殺されてやるわけにはゆかぬ」

「そうだろうね。あたしもこんな理由で殺しに来る人がいたら、全力で嫌がるし。でも、死にたくないからさ」

剣を構える。

「だから付き合ってよ、悪いけど。」

礼儀らしいから、名乗るわね。あたしは透子。とおこ 神山透子。かみやま とおこ 食べ歩きが好きな、ただの女子高生……だった」

「トオコ」

魔王は、不思議な発音だと言いたげに、あたしの名前を繰り返し

た。

「礼にのっとり、吾も名乗ろう。

北の荒野、魔の一族を統べる王、

タラチ・イアンデス・グロウガリアス」

時が止まった。

「……は？」

「タラチ・イアンデス・グロウガリアス」

もう一度、律儀に名乗ってくれた。なんかいい人だな魔王！
いやそれより。い

「……………タラちゃんです？」

玲瓏たる声音と、麗しい発音で名乗られたその名は、
一般庶民で、この世界の言語の発音に慣れていないあたしの耳に
は、某国民的アニメの登場人物の名前にしか聞こえなかった。

こんなに美形なのに、タラちゃん！

魔王さまなのに、タラちゃん！

はこの名前はイクラちゃんで、猫の名前はタマですか！ そうしてお魚くわえたドラ猫を、追いかけてりするんですか！っ！！！！

「えっと、あゝ……」

脳裏に走馬灯のように走る、元の世界のアニメの映像と主題歌。霧散しかけた気力をなんとかかき集め、あたしは剣を構え直すと、魔王に言った。

「お母さんの名前は、サザエですか！」

……でも、やっぱり混乱していたらしい。

* * *

ピンポイントでギャグが書きたくなって、書いてみました。

とりあえずこのあと、魔王さまは首輪を外してくれ、元の世界に帰る方法を探してください。

2011年11月27日 活動報告&アトリエゆずはら記事より

続きました。

ひよひよ、と、小鳥の声がした。

うらかな昼下がり。

柔らかな芝生の上に、分厚いキルトの布を敷き、あたしは絶賛、ピクニック中だった。

「うをを、このチキン絶品！ ハニーマスタードがきいてる。こっちのサンドイッチも！ チーズとバジルのハーモニーが、まったりとして、しかししつこくなくっ」
「ミルクティーもあるぞ」

隣にいる魔王が、熱いお茶を注いでくれた。

「つくつく、五臓六腑ごぞうろくぽうにしみ渡る……っ」

「それはどういう表現だ」

「端的に言うなら、うみゃい！」

「そうか。料理番に伝えておく。喜ぶだろう」

あたたかな日の光。おだやかな風。鳥の声。花の香り。

お茶を入れてくれる迫力美形。

そして、……美味しいごはん！

「やー、もう、幸せいっぱいですよ、タラちゃん」

「タラチ・イアンデスだ」

頭にねじれた角、背中に羽つきの迫力美形が言った。ティーポット片手に持ちながら。

「日本人の耳には『タラちゃんです』と聞こえるんですよ、タラちゃん。

ちなみに『ちゃん』は親愛を意味する呼び掛けのようなものです」「トオコは吾に、親愛を覚えているのか？ 吾は、人族の者が忌避する魔族の王ぞ？」

「あのクサレ王と腹黒神官に比べれば、天使のようですよ！ ごはん美味しいし、首輪はずしてくれたし」

あたしはそう言うと、ミルクティーをもう一口飲んだ。

「正直言って、この世界とは何の関係もないんですよ、あたし。なのにいきなり呼び出されて、勝手に首輪つけられて。

戦って魔王倒して来い、さもないと殺すなんて言われて、この世界の人間に義理とか信頼とか、もてるわけないでしょう」

「吾には持てるのか？」

「魔王陛下はあたしの命を救ってくれた。美味しいごはんもくれた。それに何より、」

あたしはぐっ、と拳を握った。

「タラちゃんなんて名前の人に、害意を持つのは難しいんですよ！
一般庶民な日本人としては！」

某イソノさん家のホームドラマ、おそるべし。子ども心にすりこまれた、「はーい」や、「ちゃん」の一言や笑顔が、どうしても、どうしても、ど、う、し、て、も！

魔王さま見ると、くつきりと脳裏にフィードバック。だって、タラちゃんだし！

魔王なタラちゃんは、良くわからないという顔をした。

「良くわからぬが……、まあ。しばらくは、ここでのんびりするが良い。勇者一人ぐらい、養っても問題はないゆえな」

「ありがとうございます。あ、でも、役に立てそうなおことあったら言って。無駄飯喰らいはイヤだから。荒事以外でなら協力するし」

「心配するな。ごく普通のジョシコオセイとやらのそなたに、荒事なぞ頼んだりはせぬ。」

異世界人のそなたでもできそうな仕事なら、何かしら、あるだろう。執事のオルテスに頼んでおく」

「あざーっす！」

「それはどういう意味だ」

「ありがとうございます、の略」

「そうか。あざーっす？」

「いや、タラちゃん、そんな真面目な顔して言わないで。軽いノリで言う言葉だから」

「ふむ？」

首をかしげて、魔王陛下は、あざーっす、とか、あざっす、とか、口の中でつぶやいている。迫力美形に言われると、ギャップがありすぎる。

「それにしても、本当なの？ お母さんの名前」

「む？ ああ。驚いたぞ、トオコに問われた時は」

「いや、まさかと思ったんだけど……」

「異界の勇者には、予知や透視などの能力があるのか？」

「や、あたしにはないです、そんな力。もしあるとすれば、原作者の……ええっと。長谷川町子先生にじゃないですかね」

「ハセー・ガウ・アマーチカ？ 預言者か何かなのか」

「預言者というか……、あたしの住んでた日本という国で、多くの国民に多大な影響を及ぼした、マンガ家という職業の人です。」

もう亡くなってますが、いまだに彼女の書いたものは読み継がれ、語り継がれています」

「そうか。芸術家は、預言者と似たところがある。偉大な人物だったのだな。」

吾のみならず、母の名すら看破していたとは」

「初めて聞いた時は、冗談かと思ったよ……」

魔王タラチ・イアンデス・グロウガリアス。

日本人の耳には「タラちゃんです」と聞こえる名前を持つ母親の名は。

「サザエさんなんだもんなあ……」

迫力美形な魔王のお母さまは、迫力美人なきららしい女性だった。その女性に笑顔で、『サザエです』と名乗られた衝撃は、いまだ新しい。

「サジャー・エイデス・グロウガリアスだ」

「うん、やっぱ『サザエです』としか聞こえないわ」

長谷川町子は、偉大だった。

＊ ＊ ＊

アトリエゆずはらの、拍手お礼として置いていたもの。なんだか続いてしまった。

意外でした。前編。

「ある意味、必然であると言えようのう」

迫力美女が言った。堂々たる体躯の肉食系美人である。流れ落ちる漆黒の巻き毛。真紅の瞳。象牙色をした頭の角が、つややかにセクシー。いや。

「必然？」

「うむ。まあ、説明すると長くなるのだが」

大きな窓から差し込む光が、部屋中にゆったりと、陰影をつけている。

美しい調度品が、上品に配置されたサンルーム。

白と金でできたティーテーブルには、可愛らしいお菓子を盛った器と、ティーセット。

そうしてデコラティブでありながら、繊細かつ優美な椅子に腰かける、頭に角のある迫力美人。

現魔王の母君であらせられる、グロウガリアスの魔将。麗しき魔剣の女王。

「何が必然なんですか、サザエさん」

「サジャー・エイデスじゃ」

「サザエです、としか聞こえません……」

「まあ、人族の耳には、魔族の発音は難しかろうしのう」

鷹揚に笑いつつ、サザエさんは、目の前の椅子を示した。

「まずは、座れ」

「いえ、あたしは使用人ですので」

「わらわが構わぬと言うておる。座れ」

迫力美人なサザエさんに言われ、あたしはスカートのフリルを気にしながら、優美な曲線を描く椅子に腰かけた。

タラちゃんの口利きで、あたしは現在、メイドをしている。大変な事も多いけど、でも、それなりに充実している。平穏な日々があるのって、ありがたい。たまにちよつと、元の世界の事を思い出して悲しくはなる。でも、忙しく働いていれば、気もまぎれる。

それに……うれしいこともあった。お仕着せなんだけど、デザインが可愛いんだ、魔王城のメイド服！ 渡された時にはきゃーきゃー言って喜んじやった。

ただ、たまにこうして、魔王さまや母君さまに、話し相手になれと言われるのが。ちよつと、気まずいと言うか。

と、思っていたら、合図をしたサザエさんに、ささっと近寄る先輩メイドさん。そして素早く用意された、もう一脚のティーカップに注がれる紅茶。

ことりと目の前にカップを置かれ、あたしは青ざめた。

「そなたも飲むが良い」

「いえ、あたしは」

「飲め。一人で茶をたしなんでも、楽しくもなんともない」

サザエさんは微笑みながら、しかし逆らえない何かをかもしたし
つつ、あたしに言った。うん。逆らえない。逆らったら何か、次元
の彼方に飛ばされてしまいそうな気がする。

手にしたティーカップにしかし、あたしの緊張は倍増。

「なんじゃ。ミルクティーは嫌いかえ？」

「いえ、好きです。好きなんです、ちょっと緊張してしまいまし
て」

「かわゆい事を言いおるのう」

ほほほほ、とサザエさんが優雅に笑う。あたしも強ばった笑顔
になった。いや、ミルクティーは大好きだよ！ でも、怖いんだっ
て、このティーカップ！ 持ってるのが！

手にしたカップに視線を落とす。優雅な金色の持ち手がついた、
藍色のカップ。

カップの形に削り出し、中をくり抜き、唇を当てる部分に違和感
がないよう、磨き抜いた青金石^{ラピスラズリ}。

落としたら、それまで。薄く削った宝玉のカップは、ぱんっと碎

けてしまうだろう。それほど繊細、そして匠の技を尽くした芸術品が、あっさりとあたしの手の中に。

多いんだ、そういうの、魔王城。こないだも、ガラスだと思っていたら、水晶をくりぬいて造られたグラスでしたよ。それが何ダーも並んでましたよ、キッチンの棚！ お皿やボウルでも同じバージョンがありましたね！ 紅水晶を削って形を整えたお皿がとか、紫水晶のボウルとかね！ あの大きさのもの作るのに、どんだけの水晶の塊が必要だったんだ。磨けって言われたけど、手が震えましたよ、落としたらどうしようって思ってた！

そういうグラスやカップ、お皿やボウルで、飲み食いできる神経がわかりません、サザエさん……。

「人の王の愚劣な行いは、代々続いておるでなあ。そなたのような異世界の人間を誘拐しては、剣を持たせ、われらの領土に放り出す。かような間に合せのような勇者に倒されるわれらではないが、犯罪の片棒をかつがされるようだな。良い気分ではない」

恐る恐る、涙目になりつつ一口、ごくり。そうしていると、サザエさんが言った。

眉をひそめた顔でさえ美人。

「え、あ、間に合わせ、ですか？」

「で、あろう？ 本気でわれらをどうにかしたいのであれば、自国の魔力ある優秀な若者を鍛え、軍を作ったほうがまだ、可能性はある。だというに、剣を持つ術すら知らぬような異世界の人間をさら

つてきては、死にたくなれば戦って来いと……」

ああ。そうだね。言われてみれば、間に合わせだね。あたしも、武器なんて持ったことのない人間だったし。

「自分の国の民を使うと、王の評判が悪くなるから、異世界の人間を呼んでいる、と言われました……」

それに、そんな事も言っていた。考えてみれば、あたしはあの王と神官にとって、使い捨ての道具だったんだ。

胸が痛む。そんな理由であたしは、この世界に呼び出され。

向こうの世界を、向こうの世界であたしが持っていた、大切なものの全てを奪われた。

「トオコも災難であつたな」

「いえ……あたしは。幸運でした。タラちゃんに、首輪はずしてもらったし。今もここで、働かせてもらってるし」

それでも、自分が幸運であつたことはわかる。あのまま殺されても、おかしくはなかった。でも、生かされた。助けてもらった。殺せと命じられた魔族の王に。

「トオコは、けなげよの」

サザエさんが、ふと微笑んだ。うわう。綺麗。綺麗。美人！

「いいいいえ。けなげとかそんなんじゃない……、あう、えと、必然と
いうのは、それで？」

あまりの美しさに目がくらみそうになりつつ言うと、サザエさん
は、「そうであったな」と言ってうなずいた。

意外でした。前編。（後書き）

ラピスラズリや水晶くり抜きのカップやグラスは、実物を見たことがあります。

ロマノフ王朝か何かの美術展で、展示されていました。

本水晶の光り方って、ガラスとは違うんですね……それが無造作に、カットグラスの形でずらっと並んでいるのを見て、庶民なわたしは気分が悪くなりました。あれでお茶とか飲むって心臓に悪いよ……。

意外でした。中編。

「そなた、われらの名に親しみを覚えたであろう？」

サザエさんが言った。あたしは、ほえ？ と妙な声を上げた。

「なんじゃ。息子に言うたのであろう？ わらわと息子の名に対しては、敵対する思いを抱けない、親しみを覚えると」

「あゝ。まあ。言った……ね」

あれか。あのピクニックの時の発言か。

だって、タラちゃんと、サザエさんだもんなあ。

「ハッセ・ガウー・アマルチカは、偉大な人物であつたようじやな」

「長谷川町子先生です」

異世界発音されると、どこの人ですか、な感じだね。

「『いじわるばあさん』と、『サザエさん』が代表作で……」
「おお。それか。わらわの名に似ておるのう。サジャー・エツシャ
ン」

「や、『サザエさん』……えゝ、日本語で、自己紹介の時に、『で

す』とか、『でございます』とかいう言葉をつけてですね」

あのアニメ、確か、サザエでございます、って言ってなかったっけ。

「『サザエでございます』」

と、思ったら、優雅な笑みを浮かべた美女に言われた。……何!?

「うむ、必然じゃな」

「え、いや、いまの何ですか、サザエさん!」

「わらわの名を名乗っただけじゃ」

はい?

「え、確か、『サザエです』……」

「通り名はな。幼名も入れると、わらわの名は、

サジャー・エイデ・ゴウシャ・ザイ・マルスと言う」

「……」

すみません。

庶民な異世界人の耳には、『サザエでございます』としか、聞こ

えません。

「長いので、普段はサジャー・エイデスと名乗っておるが」

。正式名が『サザエでございます』で、短くしたのが『サザエです』。
うん。丁寧語だっけ？　それが普通の言い方になってるよ。

「ああああの。それじゃ、タラちゃんにも別な名前が？」

「あれは、タラチ・イアンデスのままじゃ」

「さようですか……」

なんとなく、ほっとした。いや、別な名前があっても良いんだけどね！？

「ええっと、それで……何の話でしたっけ」

「必然の話じゃ」

いかん。『サザエでございます』の衝撃が激しくて、忘れる所だった。

「あ、はい。必然？」

「人の王の悪辣あくらつさにな、われらも辟易へきえきしたのじゃ」

ラピスラズリのティーカップを持ち上げ、優雅にサザエさんは、ミルクティーをすすった。

「したがのう。異世界からの客人は、われらの姿を見ただけで恐慌状態になる者もいてのう」

「あ、えーと……すみません」

確かに、角や翼のある姿は、予備知識なしに地球の人間が見たら……現代日本ではそれほどでもないけれど。時代によっては、恐怖にかられる人もいただろう。

魔族の人たちが悪いわけでもないのに。

「なぜ、トオコが謝るのじゃ」

「いえ、何だか……すみません」

「おかしな娘じゃのう」

ほほほ、とサザエさんは笑った。

「見慣れぬ姿の者を見れば、怯えるのは生き物の常ぞ。仕方がないわな。

したが、こちらの話も聞かず、武器を振り回し続けられてはのう。こちらも困るのじゃ。

戦いたくも、傷つけたくもないのに、怪我をさせざるを得なくて

な。こちら最初は事情もわからず。起こらずとも良い悲劇が起きたりもしたわ」

「ああ……はい」

あたしはちよつと神妙な顔になった。あたしは幸運だった。でも。間に合わずに命を落とした、異世界人もいたのかもしれない。

「まあ、それでな。われらも考えたのよ」

サザエさんは言った。

「人族の王の悪行は止まらぬ。誘拐され、死地に赴かされる異世界人は、今後もあるであろう。

ならば、異世界人にとって馴染み深い、親しみを覚えるような名を、名乗ってみてはどうかと」

……。

「はあ!？」

「うむ。じゃからな。われらは、魔王の眷属や、魔王となるのが確実な子どもには、異世界風の発音の名をつけるのよ。慎重に、占つてからな。

そなたの言う、ハッセ・ガウー・アマルチカは、力のある芸術家であったようじゃな。わらわたちの世界の占者にも、その力が見

えたのじゃから」

「はあ！！？」

「ゆえに、わらわは『サザエでございます（サジャー・エイデ・ゴウシャ・ザイ・マルス）』と名付けられ、息子には『タラちゃんです（タラチ・イアンデス）』という名が贈られた」

「はああ！？」

あたし、啞然。開いた口がふさがらない。

「え、いや、ちょ、そしたら、魔王さま、え、代々、占って、それで『タラちゃんです』とか言う名前……え、まさか！ そしたら、

『イクラちゃん』って名前の人もいますかっ！」

思わず食いついた。

「イクール・アルチ・イアンデスは、わらわの従姉弟の息子じゃ」
「おお！ タラちゃんのはところがイクラちゃん！」

素晴らしい。

「じゃ、ワカメちゃんとか、カツオくんとか！」
「ワールカ・メイチー・イアンデスは、妹じゃ。カイチ・ウー・ウオークンは、弟になる」

なに、そのシンクロ率。

「じゃ、じゃ、フネさんとか、波平さんとか、いますか!」

「フニーエ・スアンデスはわらわの母。ナムール・イーフ・エイデスは、」

「お父さんですか!」

「いや、叔父じゃ」

ニアピン。

ちよつと残念。

「うわー、でもすごいシンクロ率……」

どうしよう。変なふうにテンション上がった。

「あ、そしたらマスオさんは?」

「その名前の者は、おらぬのう」

「そうですか……」

気の毒に、マスオさん。いや、別に気の毒でもなんでもないんだけど!

「こっちでも影が薄いのか、マスオさん。あの話でも婿養子状態だったし……ん？」

あれ、そしたら、こっちの占い師さんが優秀だってことで、長谷川町子先生が預言者とか何とか言うことにはならないのじゃ？」

意外でした。後編。

あたしの言葉にサザエさんは、首をかしげた。

「なぜ、そうなるのじゃ？」

「え、だって。こっちの魔族の人が占って、あたしの世界の、良く知られたマンガの登場人物の名前を、その、見つけてくるんだっただけ……」

「トオコ。物事は響き合い、連動するものぞ？」

サザエさんは、つややかな黒髪を優雅にかきあげた。

「世界と世界は、互いに映し合い、つながりあうものぞ」

「はあ」

「ゆえに、われらが占って見つけた名は、そなたの世界においても預言の元にある名である」

あたしは、首をかしげた。

「よくわかりませんが……」

「力は力を呼ぶ」

サザエさんは言った。

「わからぬか？ そなたの知るハッセ・ガウー・アモールチカが偉大な人物であったからこそ、

われらの世界にその力が響いたのじゃ。

その響きを、占い師は見つけ、引き込んだ。

ゆえに、ハッセ・ガウー・アモールチカは、預言したとも言えるのじゃ。意識せず、それでいて確実に、二つの世界をつなげたのじゃからのう。おのが作品によって」

「え、……ええ？？？」

「わからぬか。したが、そういうものじゃ」

くくつと笑ってサザエさんは、ミルクティーを一口飲んだ。

「魔法の法則は、あたしにはさっぱりです……」

「力は力と呼ぶだけじゃ。単純じゃぞ？」

「う、ううーん？」

全然わからん。

「ええつと……とにかく！ 異世界の言葉を、代々の魔王さまは名前にしてるんですね？」

「そうじゃ。それで、まあ、悲劇はかなり減った」

サザエさんの言葉に、あたしは納得した。そりゃそうだ。『サザエでございます』とか、『イクラちゃんです』なんて名乗られたら、

思わず止まる。思考とかやる気とか、いろいろ。

「そう言えば、あたしの他にも勇者っていたんですか？」

「何人か会うておるぞ。どうも、そなたと同じ世界とは限らぬようじゃが」

「そうなんですか？」

「うむ。わらわや、妹たちの名に反応せぬ者もおったのでな。そなたの前に来た勇者は、おそらく同じ世界の者であろうが」

「あたしの前の勇者……」

「三十年ほど前になるか。若い男でな。相手をしたのは、わらわだつたのじゃが……、名乗った瞬間、泣き崩れられた」

「は？」

「『こんな美女が、サザエさんだなんて……！』と言われてのう。魚をくわえた猫がどうのと言っておったが」

「あゝ……それ、たぶん、あたしと同じ国の人ですね……」

衝撃の度合いがわかる。脳裏に流れたであろうテーマソングも、あたしと一緒にいただろう。

「あれ、でも三十年？ そんな前からあのアニメあったっけ？」

「あちらとこちらでは、時の流れが違っておるようじゃぞ。勇者たちの話をまとめれば」

「あ、そうなんですか？ あやゝ……そういう設定の話あるな、言われてみれば」

むこうの世界で読んだ、異世界トリップもののラノベを思い出し

つつ、あたしはうなずいた。

「まさかの同級生だったり？ いや、それはないか。いきなり行方不明になった同級生とか、いなかったよね……むしろ、あたしが行方不明者……」

あ、ちよつと落ち込んだ。

「いや、すっかりしろ、あたし。ええとサザエさん。それで、その勇者はどうなったんでしょか」

「会いたければ呼び寄せるぞ」

「呼び寄せ……え、まだこっちで生きてるんですか!？」
「うむ。」

わらわの夫じゃ」

………はい？

「シュウ・ゴー・HAMMER・ノウ・レク・サージャ。いろいろあつての、わらわの夫におさまった」

につこりと、サザエさんが微笑んだ。

「え、しゅうご……修吾さんかな。ハマー・ノウ……浜野？ 夫……え、じゃ、タラちゃんのお父さん？」

「うむ。わが城に住み込んで、あれやこれやと働いておる。ああ、『レク』というのは、婿という意味じゃ。レク・サージャで、わらの婿、ということじゃな。」

シュウゴにはこちらに身寄りがなかったゆえ、わらわが娶る形になつての」

「は、じゃあ、えと、いわゆる入り婿……ってことは」

あたしは思わずつぶやいた。

「リアルマスオさん」

会いました。

「……と、言うわけで、俺が浜野修吾はまのしゅうごです。前魔王陛下であるサザエですさんの、夫をやらせていただいています」

三十過ぎに見える、純日本人な顔立ちの男の人が、会釈して言った。あたしは軽く頭を下げた。

「神山透子かみやまとこです。えっと、浜野さん、あたしと同じ日本人……」

「そうだよ。透子ちゃん……そう呼んで良い？ 透子ちゃんも、衝撃受けたでしょ、魔王の名乗り聞いて」

「ええ、まあ。……『タラちゃんです』って言われたし」

「俺は、『サザエでございます』だった」

二人して、遠いまなざしになった。

「長谷川町子ってすごいよね」

「そだね。……おれ、タラチが生まれた時にさ。もっとカッコイイ名前にしたかったんだけどさ」

あ。やっぱり、タラちゃんのお父さんなんだ。

「サザエに晴れやかな顔で、『この子の名前はタラちゃんです！』

って言われた時には、泣けば良いのか笑えば良いのかって気分になったよ。わかってるんだけどね？ 次に呼ばれる勇者のためだってわかってはいるんだけどね？

でも自分の息子に『タラちゃん』って……！」

こっそり泣きました、と浜野さんは言った。気持ちわかる。

「えっと、でも、魔王って代々、イソノさん一家の名前になるの？ この先も？」

「この先はどうかかわらないけど……俺の前の勇者のときは、魔王の名前はイソノ家の名前じゃなかったよ」

「へえ？」

「その時は確か、アイムー・ミク・イーマ・ウーシュと、アイムー・ミヌー・イーマ・ウーシュっていう、双子の魔王だった」

「ん〜？」

あたしは首をかしげた。何のアニメだろう。その名前のキャラクターが思いつかない。

「えと、アイムー……？」

「知ってると思うよ、透子ちゃんも。」

ちなみに、その時の勇者は、魔王の名乗りを聞いたとたん、笑いの発作に取りつかれて、どうにもならなくなったらしい。最終的に、『子どものころの友人であるミッキーとミニーに剣を向けるなど、俺にはできない！』と言って、戦闘はチャラになった」

ミッキーとミニー？

「I'm Mickey Mouse (アイム・ミク・イーマ・ウーシュ)と、I'm Minnie Mouse (アイム・ミヌー・イーマ・ウーシュ)」

浜野さんが発音してくれた。ああ。

「世界的に有名な、例のネズミたちですか……」

英語圏の人だったらしい。

「召喚される勇者の国に合わせて、アニメのキャラの名前、引っ張り出してるんですか。マジパネエ、魔族の占い師」

そうして、「俺はミッキーマウスだ!」「あたしはミニーマウスよ!」と名乗られた、英語圏の勇者の衝撃も、半端なかっただろう。笑いの発作か。うん、そうだろうね……。

「えーとでも、浜野さん、若いね? 三十年こっちにいるって聞いたけど」

話題を変えると、浜野さんは、ああ、という顔をした。

「あ、それね。ちょっと裏ワザって言うか。俺、今、五十は越えてるんだ」

え。

「来た時、二十六だったから。でも、サザエと一緒にってから、何か起きたみたいで。老化がゆっくりになった」

「へえ……」

「まあ、でも、ありがたいよ。魔族は長命だし。タラチが成人するまで、生きていたかったからね」

「ああ。……良かったですね。タラちゃんも立派な魔王になったし」

そう言うと、浜野さんは、照れたような、誇らしいような顔をした。あ、お父さんの顔だ。

「親の欲目じゃないけど、タラチはがんばってるよね」

「あ、はい。カッコイイです。貫禄あるし。お城の人たちからも、慕われています。評判良いですよ」

「あ、そう？ ふふふ。だって、サザエと俺の子どもだもんね」

「デレデレな顔になってますよ、浜野さん」

ふふふ、とあたしが笑うと、浜野さんは赤くなって、でも嬉しそうな顔をした。

「いや、ほんとにね。タラチは、体が弱くて。熱ばかりだす子だったんだよ。それが、大きくなって……感慨深いと言うか」

「タラちゃん、体弱かったんだ……」

「うん。サザエの魔力が強いのに、俺はそうでもなかったから……子どもに影響出たみたいで。でも、ここまで大きくなったんだから、もう大丈夫だよな。」

後は、成人するだけだし」

……え？

「浜野さん、今、なんて言いました？」

「ん？ サザエの魔力が強いのに、俺はそうじゃない……」

「いや、その後」

「子どもに影響出たみたい？」

「もうちょっと」

「大きくなったから、もう大丈夫……あとは成人するだけ？」

きょんとした顔の浜野さんに向かって、あたしは叫んだ。

「タラちゃんて、成人してないんですか!？」

「まだだよ。だって、あの子、十五歳だから」

なんですと！？

「まさかの年下っ！！！！！！？」

衝撃の事実。

魔王さまなタラちゃんは、年下の男の子でした。

集まりました。

目の前には、きらきらしい美形たち。

青く輝く髪と、氷にも似た薄青の瞳、白く輝く角と翼も神々しい男性。彼の名は、

「波平さん」

「会えてうれしいぞ、トオコ」

優雅な微笑も神々しい。なのに波平さん。彼の名前は、波平さん！

「ほんに。こたびの勇者はかわゆらしいのう」

「フネさん……」

真紅の髪と瞳の、燃え上がらんばかりに情熱的、官能的な美女が言った。漆黒の角がセクシーです、お姉さま。動くたびに、お胸が揺れてます。フネさんなのに。フネさんなのに！

「タラチは、良い娘に出会ったよね」

涼やかな声音で言う、金髪碧眼の美青年。金色の角と翼がまばゆい。音楽とか聞こえてきそう。ハレルヤとか歌いたくなりそう。

「イクラちゃん……」

そんな彼の名前は、イクラちゃん。
あたしは、思わず天を仰いだ。

「どうした、トオコ」

その中でも、美形ぶりではひけを取らない、赤い瞳の漆黒の魔王さまがこちらを見る。なんかもう、無駄にキラキラしてませんか。

「なんでもないです、タラちゃん。ちょっと、無性に、いろんな所にゴメンナサイと言いたい衝動にかられただけです」

涙をこらえつつあたしが言うと、タラちゃんは「ふむ？」と言って首をかしげた。

「父上と同じようなことを言うな。異世界の勇者とは、みな突然に天を仰いだり、打ちのめされたような顔で、夕日に向かって走ったりするものなのか」

「異世界には異世界の事情が……って、浜野さん、そんなことやっ
てたんですか」

「『サザエさんのお母さんが、フネさんだなんて〜！』と、叫びな

がら」

ああ。いろいろ、いろいろ、ギャップを感じたんだろうな。フネさんの揺れる胸を見つめつつ、あたしはそう思った。

「異世界の勇者とは、良くわからないものだな」

教官！　と言いたくなるような、クールな美女が言った。青みがかった銀髪に深い青の瞳、白銀の角と翼の、

「ワカメちゃん」

「俺もいるぞ」

ワカメちゃんと同じ色彩の、くだけた感じの美青年が手を振った。

「お久しぶりです、カツオくん。この間は、お花をありがとうございました」

「女の子への礼儀だから」

きらきらしい笑顔で、銀髪の青年が手をひらひらとしてみせる。ちょっとチャライ感じが魅力的と言うか、まばゆいと言うか。

あ、いかん。本気で涙が出てきた。もう、キラキラがハレーション起こしそうだよ、美形集団。ああ。それなのに。それなのに。

某イソノさん一家の名前なんだよ、全員！

「話には聞いていたが、こうして直に見てみると、トオコは可愛らしいなあ。自分をしっかり持っているし」

微笑む波平さんこと、ナムール・イーフ・エイデスさん。自己紹介の時には、『波平です』としか聞こえなかった。

「あれこれと着飾らせ、可愛がりたくなるのう。どうじゃ？ わらわの城に来ぬかえ？」

色気満載の微笑みを向けてくる、フネさんことフニーエ・スアンデスさん。彼女の名前はあたしには、『フネさんです』としか聞こえない。

「ふむ。だが、異世界人の変わった所はなあ」

「別に良いじゃない、それぐらい。チャームポイントだと思えば」

どうやら双子だったらしい、『ワカメちゃんです』ことワールカ・メイチャー・イアンデスさんと、『カツオくん』こと、カイチ・ウー・ウオーケンさん。

「祖父殿は、何かと良く笑い出す癖を持っていたではないか。異世

界の者には、異世界の者の事情があらう。のう、シュウゴ？」

そこにサザエさんこと、サジャー・エイデス前魔王陛下が言う。唯一、あたしと同じ感覚を共有できるだろう日本人にして元勇者、今はサザエさんの婿という立場になった浜野さんは、ひっそりと気配を消すようにして立っていたのだが。この言葉に苦笑いを浮かべた。

「サザエ……ああ……まあ、そうですね……」

「そんな所もかわゆく思っておるぞ、シュウゴ」

「さ、サザエ……」

浜野さんは、真っ赤になった。よっ、ご両人。ラブラブですね、リアルマスオさん。

「それにしても、笑い出すおじいさんって……」

「吾には曾祖父に当たるな。四代前の魔王、アイムー・ミヌー・イーマ・ウーシュの婿になった勇者だ」

あたしがつぶやくと、その言葉を聞きつけたタラちゃんが言った。浜野さんが、「ミニーマウスと結婚した人」と解説してくれる。ああ。例の英語圏の人か。

「魔王と結婚する勇者、多いんだ……？」

「うん、まあ。なぜかそうなる確率が高いみたいだよ。だから、透

子ちゃんも安心してね」

「え？ 何を」

「またまた。わかってるからね？」

いや、何を。

浜野さんからの謎の言葉に首をかしげつつ、あたしは改めて、周囲を見渡した。

魔王城のサンルーム。光が差し込む、美しい部屋。のどかで平和な場所。

そこにいる美形集団。まぎれこんだあたしは、すごく居心地悪いです。どっちをむいても美形。どこを見てもキラキラ。

「浜野さん……、そばにいて良いですか！」

「え、なに急に」

「浜野さんの顔が、今のあたしには安息の地なんです！」

美形集団にストレスを感じて、あたしは浜野さんの側に寄ろうとした。ビバ、普通顔。ビバ、のっぺりな日本人顔！

と、思っていたら、後ろから襟首をつかまれ、ぐいっと引っ張られた。

「うひゃわ！」

バランスを崩して転びそうになったが、ぽすっと誰かの胸に抱きかかえられ、免れる。……って、誰かの胸？

「おや」

「まあ」

「ほう」

「ひゅーひゅー」

周囲から上がる声。見上げたあたしの目に、不機嫌な顔のタラちゃん。え？ 何がどうなった。

「え、ちょっとタラちゃん。なんで引っ張ったり」

「トオコは」

もがいて腕から抜け出そうとしたが、タラちゃんは許さず、さらに力をこめてきた。ぐえ。

「吾より父上が良いのか」

「はあ？ 何の話……」

「父上は、母上のものぞ。トオコが想ったところでどうにもならぬ」
「いや、だから、何の話」

あわあわしていると、「これ、女子おなこに対して乱暴じゃぞ、タラチ。トオコに怪我をさせる気か？」とサザエさんが言った。タラちゃん

は、不満そうな顔をしたが、腕の力をゆるめた。あたしはあわてて、タラちゃんの腕から抜け出して、距離をとった。

すると、ずん、と空気が重くなった。ちよつと冷や汗が出た。何だかよくわからないけど、タラちゃんの不機嫌さに拍車がかかっている。

「ははは。若いなあ、タラチ」

「女の子は、優しく扱わないとダメよ」

「やっぱり良いなあ、タラチ。魔水晶の鉱山一つあげるから、交代してくれない？」

周囲から、上がる声。わけわからん。特に最後の、イクラちゃんの発言は、なんなのだ。

「断る」

タラちゃんは、威嚇するような勢いでイクラちゃんに言う、またあたしの腕をつかんで引っ張り、抱きついてきた。ちよつと！

お姉さんに甘えたい子どもですか、君は！ 十五歳なのは知っているけど、見かけは完全に成人男性なんですよ、異世界事情か何だか知らんけど！

うお、なつくな！ なでるな！ 匂いをかぐな！ ヤメテヤメテ、お姉さんのライフはゼロよ！

「おお、仲が良いのう」

がっしり抱き込まれ、ふんふん匂いがかがれ、ぐりぐり頭をこすりつけられたあたしがじたばたしていると、微笑ましげに言われた。眺めてないで止めてください、サザエさん！

「本当だね。相性もよさそうだし。一族の主だったものも、好意的だしね。良かったね、透子ちゃん」

にこにこしながら、浜野さんが言った。何が。何が良かったんですか！

すると、浜野さんは、爆弾発言をしてくれた。

「だって、君はタラチのお嫁さんになるんでしょ？ 集まったみんなに認めてもらえて良かったねえ」

その瞬間。

あたしの中で、全てが止まった。世界も。思考も。何もかも。ただ、浜野さんの言葉だけが。繰り返し、あたしの中で響いていた。

タラチのお嫁さん。
タラチのお嫁さん。
タラチのお嫁さん。

「……タラちゃんの、お嫁さんんんんんんっ！？」

そうして次の瞬間、動き出した世界の中、愕然として叫ぶあたしがいた……なんでやねん！

集まりました。(後書き)

まさかのラブコメ展開。

話しました。前編。

「それで、どうしてこうなっちゃったのか、説明してほしいんですけど」

ジト目であたしが言うと、浜野さんが苦笑いをした。

「いやゝ、まあ……ねえ？」

「誤魔化されませんから。そんな顔されても」

「や、誤魔化す気はないんだけど……うちの子が申し訳ない。てつきり手順は踏んでるものと……えゝ」

「手順も何も、あの日初めて聞かされましたよ、あたしがタラちゃんの花嫁候補だなんて！」

魔王城の庭。のどかに小鳥がさえずり、美しい花々が楽しめる東屋で、あたしと浜野さんは向き合っていた。

後ろからあたしをがっしり抱き込んで離さない、タラちゃん込みで。

「何とかしてくださいよ、これ！ なんなんですか。ついて回られるし、抱きつかれるし、匂いかかれるし、舐め回されるし、変態にもほどがあるって、だから舐めるなゝゝゝ！」

べろりと首筋をなめてきたタラちゃんを、ばこつと殴る。しかし

タラちゃんはあきらめない。ぎゅうぎゅう腕の力を強めてくる。

「ぐえ、痛い痛い、痛いって！」

「離しなさい、タラチ！ 彼女を殺す気ですか！」

あたしの様子に慌てた浜野さんが言い、手を伸ばしてべしっと角を叩いた。ぐう、と妙な声がして、腕の力が弱まる。

「ああ、透子ちゃん、魔族の弱点、角だから。絶対的な弱点ってわけじゃないけど、びっくりさせるぐらいはできるからね？ ほら、タラチ、離しなさい！ 女性への礼儀はどこへ行った？」

恨めしげに浜野さんを見ていたタラちゃんは、しぶしぶとした感じで、あたしから腕を離した。

その代わり、体をくっつけてきたけど。東屋の椅子が、なんかぎゅうぎゅうな状態に。

「犬か」

「似たようなものだね」

思わすこぼしたあたしの言葉に、浜野さんがうなずいた。

「サザエの母方の祖先に、炎狼がいたそうだから。タラチにもその

形質が出てゐるらしいよ。目が赤いでしょ」

「へえ、そう……って、ワンコ入ってるの、タラちゃん!？」

だからか。だから、匂いかがれたりしたのか。

「でもなんで、こんなにくつついて……ちょっと、タラちゃん！
説明してもらえない？ どうしてあたしが、あんたの嫁候補なのよ
！」

するとタラちゃんは、傷ついたような顔をした後、驚愕の言葉を
放った。

「最初に申し込んできたのは、トオコの方ではないか」

なんですと？

「あたしが、いつ」

「初めて出会った時だ。そなたは吾に、婚姻の申し入れをしてきた」

なんですと!？

「魔族の王たる吾に対し、一步も引かず。堂々たる申し入れであつ

た
」

……。

「なんですと~~~~~っ!!??:??:?
」

話しました。中編。

「待て。ちょっと待て」

あたし、混乱中。何がどうして、どうなった。

「あたしが、あんたに、けっこんの、もうしこみ、したって？」
「驚いたが、その気概は好ましいと思った」

タラちゃんは、ほんのりと頬を染めた。うをを、超絶美形がデレ
てる！ 目の保養！ いや、そうじゃなく！

「うおおおおあたし何言った〜〜！」
「透子ちゃん、落ち着いて」

浜野さんが、声をかけてくる。あたしは椅子から立ち上がると、
浜野さんに駆け寄った。胸ぐらをつかんで叫ぶ。

「アレですか！ 異世界事情！ なんか変な習慣が結婚の申し込み
になっちゃうとか、うっかり言った何かがたまたま、プロポーズの
言葉になっちゃったとかっ！」

某アニメみたいに、平手打ちがプロポーズとか。
そう思っていたら、浜野さんがタラちゃんに声をかけた。

「いや、だから、落ち着いて……タラチ？　彼女は何をしたんだい。
アングゲラ族の裸踊りとか、メルフォゲスラ族の魅惑の這いずりと
か、したのかい？」

なにそれ。微妙に詳細が知りたいぞ。

「父上……いや。トオコは別に、狂乱の裸体をさらしたわけでも、
色香を放つ這いずりをしたわけでもありません」

やってないよ！　何を狂乱したり、イモムシやったりするんだよ
！　　ってか、色気あるの？　　這いずるのに？

「吾も父上から、異界の風習は聞き知っております。トオコはまさ
に、その風習に則って吾に求婚しました」

「いやだから、あたし、そんな事した覚えないって！　異界の風習
ってナニ？　何がどうしてプロポーズになったわけ？」

思わずそう言うと、タラちゃんは言った。

「トオコは吾に剣を突きつけてきた」

「いやそりゃ、戦うつもりだったしね」

「そうして、言った。『結婚を前提としたお付き合いをしてほしい』と」

「はい？」

あたしは硬直した。

「言ったの？」

浜野さんの言葉に首を振る。なぜに、そんな言葉を言ったと誤解されているのか。

するとタラちゃんは、顔を歪めた。

「トオコははっきりと、吾に向かって言ったではないか。あの時の自分の言葉を、良く思い出してみるが良い」

「え？」

あたしは眉間にシワを寄せると、タラちゃんとの出会いを脳裏に再生しようとした。

く回想中。

『死にたくないから、ここまで来たわ』

魔王は、あたしを見つめ、ふうと息をついた。

『まこと、愚かしい行いを繰り返すな、人の国の王とその取り巻きは。』

哀れとは思うが、勇者よ。吾も殺されてやるわけにはゆかぬ』

『そうだろうね。あたしもこんな理由で殺しに来る人がいたら、全力で嫌がるし。でも、死にたくないからさ』

剣を構える。

『だから付き合ってよ、悪いけど。礼儀らしいから、名乗るわね。』

あたしは透子^{とおこ}。神山透子^{かみやま とおこ}。食べ歩きが好きな、ただの女子高生……だった』

『礼にのっとり、吾も名乗ろう。』

北の荒野、魔の一族を統べる王、タラチ・イアンデス・グロウガリアス』

く回想終了。

「やっぱ、結婚してくれなんて言った覚えはないけど……」

首をひねると、タラちゃんが、むう、という唸り声を上げた。

「トオコにとって吾は、さほどに小さき存在か。あれほど情熱的に申し込んでおいて、それを忘れるとは……」

「え、いや、タラちゃんには感謝してるよ!？　すごいありがたかったよ!　今も仕事もらってるし、もう足向けて眠れませんかぐらい恩人だよ!」

慌ててあたしは言った。

「でもあたし、そんな事言ったわけ……?」

タラちゃんは、不機嫌そうな顔になった。

「では、教えてやろう。トオコは吾の所に来て、『おまえが魔王か』とまず、問うた」

「ああ、うん」

あたしはうなずいた。確か、そんな感じだった。

「『そなたがこたびの勇者か』と尋ねた吾に、そなたは諾と答え、旅路での苦勞と、呪いの首輪をつけられた事を語った」

「うん。確かそうだった」

タラちゃんは、続けた。

「そうして吾に剣を向け」

「うん」

「結婚しろと言った」

「いやそこ、おかしいから！」

あたしは叫ぶと、必死になって記憶を探った。あの時、あたしはなんて言った？

「えーと、だから！ 確か、首輪があるからって言って、死にたくないから、ここまで来たって言った、けど」

「うむ」

「で、名乗って」

「いや、その前だ」

「その前？」

く再び回想中。

『死にたくないから、ここまで来たわ』

『まこと、愚かしい行いを繰り返すな、人の国の王とその取り巻きは。』

哀れとは思うが、勇者よ。吾も殺されてやるわけにはゆかぬ』

『そうだろうね。あたしもこんな理由で殺しに来る人がいたら、全

力で嫌がるし。でも、死にたくないからさ』

『だから付き合ってよ、悪いけど』（↑）

く回想終了。

え。

え。

え。

「まさか……あれ？」

「思い出したか」

「いやだって……なんであれでプロポーズの言葉になるのよ！ あれって単に、今から殺し合いになりますけど、すいませんって意味の言葉じゃない！」

「えーと、実際にはなんて言ったの、透子ちゃん」

黙ってやりとりを見ていた浜野さんが、そこで尋ねてくる。

「だから、こう、剣を向けてですね？ 召喚された事と、呪いの首輪の話をしてですね？ どうしても戦わないとって説明して、『悪いけど、付き合ってよ』って」

すると、タラちゃんが言った。

「あれは、異界の正式な婚姻申込みではないか。父上が教えてくださった通りの作法であつたぞ」

沈黙が落ちた。

「息子になに教えてんだ、浜野さん~~~~っ!~!!」

話しました。中編。(後書き)

長い伏線だった……。

話しました。後編。

「あのね。言っとくけど、あんたが聞いた異世界の風習は、かなり偏ってるから」

「そうか？」

あたしが言うと、タラちゃんは、こてりと首をかしげた。ぐっ。
なんか可愛いじゃないか。

「そうよ。ってか、どんな話を教わってたのよ、タラちゃん」

「うむ。吾は、異界の物語を聞いて育ったのだ。父上は吾が幼きころ、様々な物語をして下さったからな。子ども心にも素晴らしかったぞ。」

タラちゃんは、満面の笑みを浮かべた。

「巨大な金属の、二足歩行をする魔物を操る少年の物語には、胸が踊った。少年の、『赤い彗星』と呼ばれた勇者との一騎打ちは、素晴らしかった……」

ガンダムかい。

「親をなくした少女が、気難しい祖父と山で暮らし、人々の心をほ

ぐしてゆく物語は、切なくもあった。引き取られた家で、足の不自由な娘をはげまし、ついにはその娘が癒され、立ち上がったと聞いた時の感動は、忘れがたい」

ハイジかい。

「敵対し合う者同士が、ひとつの球を取り合い、守り合い、そうして絆を深めてゆく物語は、友情の美しさを吾に教えてくれた。球を取り合うだけの競技に何の意味があるのか、正直わからなかったが。しかし『ぼすけ』は、わが領土で現在、人気のあるゲームとなっている。吾は、ルカワが好きでな」

スラムダंकかい。

「あんた、ホントに、息子になに教えてんの」
「いや、タラチが楽しそうに聞くもんだから、色々と……、日本のアニメは最高なんだよ？」

ぼそぼそと言い合う、あたしと浜野さん。
タラちゃんが続けた。

「しかし何より、異界の少女たちの健気さに吾は、憧れた……恋にかける情熱、とまどい、そうして切なさを抱えつつ、それら全てを糧として、自らを成長させてゆく貪欲さ。全てを巻き込み、破壊し

つくそうとも、己が情熱を追求し、突き進む信念と勇氣。

『キャンディ・キャンディ』と『ガラスの仮面』は、吾の心の聖域とも言えよう」

「あれって、そういう話でしたか」

「いや、異世界ナイズしたら、そんな事に」

どんな話を聞かせたんだ、浜野さん。

「愛した男を失い、治癒の魔術を学ぶと決めたキャンディが、戦を続ける国王に反乱を起こし、仮面をつけて成敗する場面では、涙が出た。」

千の仮面を持つ怪盗、マヤが恋しい皇太子マスミとの恋に敗れ、しかし皇太子の幸福を願い、クレ・ナーイ・テンニョの大魔法を使った時には、二人を幸せにしてやってくれと言って父上を困らせたものだ」

「キャンディは看護婦で、マヤは女優じゃなかったっけ」

「異世界で常識違うからね？」

それはもはや、別の物語です。

「そういうわけで、吾は、異界の風習や事情に詳しい」

「いや、それで詳しいと言われても」

思わずツツコミを入れてしまった。だがタラちゃんは聞いちゃいねえ。

「トオコが吾に剣を向け、例の言葉を言った時にすぐにわかった」
「なにがですか」

嫌な予感を覚えつつ尋ねたあたしに、タラちゃんは言った。

「これこそ、『ヤン・キー』と『セイト・カイチョー』の恋物語！
力でもって愛しい男に自分と結婚しろと迫る、実は純情な『ヤン・キー』少女の、切なくも血沸き肉踊る、青春と恋のツンデレ物語のクライマックス・シーンにそっくりであった！

トオコの婚姻の申し入れ、吾はしかと受け取ったぞ」

「あたしはヤンキーで、ツンデレかいっ！ しかもあんたさりげなく、自分を優等生ポジションに置いたなあっ！

大体、どこの少女マンガだよ、そんなベタベタ……」

そこで、微妙な顔をしている浜野さんに気づいた。

「浜野さん？」

「ベタベタ……かなあ」

「え？ や、ひねりがなさすぎるでしょ、陳腐だし。設定」

「そう、だよねえ。うん。俺、やっぱ才能なかったんだなあ」

才能？

「俺、少女マンガ好きでさ……某雑誌に投稿してたんだけど。その時、唯一、二次まで通過した作品だったんだ……」

しょぼーんとしたふうに言われた。がっくり肩落とされて。

「ああ……え……な、なんか、すみません」

「良いよ。所詮は二次通過作品……それ以上はどうしても、行けなかったんだ」

「は、はあ」

「タイトルは『キラリ☆お嬢さんヤンキー、恋のドキドキ混戦模様』で」

「きらりおじょうさんヤンキー……」

タイトル痛いよ。なんか痛いよ。

「主人公の舞閨蝶子^{まいやみちようこ}は、歩いた後には流血の荒野が広がると言われた、鬼神のごとき強さを誇るレディースの総長で」

「そののどが『キラリ』で『お嬢さん』なんですか」

流血の荒野って所でもう、可愛らしさとか、さわやかさから遠ざかってるんですけど。

「うむ。荒ぶる男どもを細腕一本で下し、並ぶものなしたうたわれたチョーコの恋した男は、セイト・カイチョーという男だったのだ」

そこでタラちゃんが口をはさんだ。目がキラキラしている。

「彼は実は、小国の王子であつた。王位継承の揉め事から、市井^{しせい}に身を隠していたのだ。しかし、身の危険が迫る。弟に王位を継がせようとする、継母の陰謀が！

愛しい男の命を守ろうと、正体を隠して側にいたチョーコだったが、朋友を人質に取られ。恋した男の前で正体をさらさざるを得なくなった」

「生徒会長が王子なの！？　それでまた、ベタ展開！？」

なんだその無茶設定！

「囚われの身の王子を助けに、群がる悪党をなぎ倒し、なぎ倒し、ついに満身創痍で王子の前に立ち、『逃げて』と言って倒れたチョーコの切ない純情に吾は……泣いた。

そんなチョーコに、『君の心こそが何よりも美しい』と言ったセイト・カイチョー……二人の恋を阻む者にこそ、呪いあれ。この吾、魔王たるタラチ・イアンデスの怒りの雷を受けるが良い！」

「語ってるし！？」

「タラチは昔からこの話が好きで、何度もせがまれたからね」

照れるね、とか言いながら、浜野さんが頬を染めている。

「そう、吾の初恋は、まさにチョーコ。強く、激しく、純情可憐な異界の女傑^{じょけつ}。」

チョーコに代わる女性など、いないと思っていた……しかし、そうではなかった。

あの時、吾の前に立ち、剣を手にしたトオコを見て、吾は戦慄^{せんりつ}した。父上の語るお嬢さん『ヤン・キー』、闇を舞う正義の蝶、莊嚴たる雷電のごとき、そのたたずまい」

「なに、その中二病みたいな二つ名」

「そしてあの言葉……物語のクライマックスで、隣国の王女との婚約式に乗り込んだチョーコは、集まった人々の前、王子に剣を突きつけて言うのだ。」

『莊嚴たる雷電、参上!』」

ぐは!

参上ってなんだ、参上って! 莊嚴たる雷電って、自分で言うか、その恥ずかしい名前を人前で!

「『付き合ってもらおうよ、セイト・カイチョー。あたしのものになりな。答はイエスしか認めない』」

しかも言った！ ベタベタな『卒業』ばりなセリフ言った！ うわあああ、めっちゃ恥ずかしい、言ったのはあたしじゃないんだけど！

「そうして王子は、チョーコにさらわれ」

「さらわれるのが王子の方かい！」

もう、ツツコミ入れるのも疲れてきた。浜野さんを見ると、「自分の作った話が語られるのって、なんか恥ずかしいねえ」とか言いつつ、照れている。

照れている場合か！ と言いたかったが、その前にタラちゃんが言葉を続けた。

「トオコが吾に言った言葉とまったく同じ！ ゆえに、吾は悟ったのだ。」

これは婚姻の申し入れであると！」

「そこにつながるのか……いっつっ！……！！！」

力の限り叫んでから、息を切らせてぜいぜい言ってるあたしに、タラちゃんは言った。

「かほどに情熱的な申し入れを、どうして断れようか。トオコ。吾はいつでも、トオコにさらわれる所存であるぞ！」

「その認識は違う！ 間違いだから！ 浜野さん、何とか言って…
…浜野さん？」

振り向いたあたしが見たものは。

真っ赤になって照れまくる、物語の作者たる浜野さんだった。

「やゝ、もう、タラチは良く覚えてるよねえ、自分の作った話がこ
うも、感情こめて語られると、感無量……」

「さっさと誤解解きなさいよ、あんたがタラちゃんに教え込んだん
でしようが、間違った異世界事情……っ！」

浜野さんにつかみかかり叫ぶあたしは、物語中の『莊嚴たる雷電』
、『正義の闇蝶』、舞闇蝶子そのものであったと、後にタラちゃん
は語ったらしい。

話しました。後編。(後書き)

ヒヤダインの『カカカタ☆カタオモイ』と、『じょーじょーゆーじょー』を、ユーチューブで見た後に書いたら、こうなった。

尋ねました。 1

『きらり☆お嬢さんヤンキー』の話に意外とダメージを受けたので、浜野さんアレンジの異世界の物語がどう伝わっているのか、魔族の人たちに尋ねてみた。

「イクラちゃん。ちょっと尋ねたいことがあるんだけど」

「なんだい？」

「異世界の物語って、聞いてたりする？」

「ああ。タラチの父上は、素晴らしいストーリーテラーだね！彼の語る物語は、今や魔界全土に広まっているよ！」

「広まってるんだ……えーと、魔術師のキャンディ・キャンディとか、怪盗のガラスの仮面とか？」

「失われた魔王の力を魔族の少年少女が探す、『魔王の珠』とかね！」

「魔王の……？（なんだろう）」

「魔王の力が七つの魔水晶になって世界に飛び散ったのを、人間の世界に魔族の少年たちが潜入し、集める話だよ。友情とか裏切りとか、いろいろあって、聞いててワクワクしたよ！主人公のゴクウは今でも、魔族の少年少女たちの憧れだよ！」

「ああ……ドラゴンボール」

「人間に迫害されても、良い人間はいるんだから、きっと友達になれると言うゴクウに、幼いぼくは涙したよ……」

「ああ……こっちでは、魔族が人間ポジションになるから……」

「電撃魔法を使う黄色いネズミ族の少年との出会いと別れは、今も『美しい友情』の代名詞になっているよ」

「ネズミ族？ え、こっちそんな種族いるの？」

「少数民族だけどね」

「いるんだ。でも、ネズミ族……そんな登場人物いたっけ」

「合い言葉は『ピッカー！』」

「ピカチュウかい！」

「『カメハメハに代わっておしおきよ！』の決めゼリフは、今もあちこちで語られているよ！」

「なんか混じってる！ いろいろ混じってるよ、浜野さん！」

「ゴクウの使う必殺技、『カメハメハ・クリスタルパワー・メイクアップ！』は今では、魔族の第一近衛師団の装備魔術として採用されているし」

「それ変身の呪文、ってか、マジに使ってるの必殺技」

「使えるようになるまで、血の滲むような努力と研鑽、苦労があったらしいよ」

「したんだ、努力。使えるようになったんだ、しかも。ってか、カメハメハのクリスタルパワーって……」

「素晴らしいのは、『カメハメハ・ヒーリング・エスカレーション』だね……再現に十年以上かかったらしいよ。」

近衛師団の勇猛な戦士達が全員、一斉に変身して、周囲にあるものを光の魔術で押し流す光景は、壮観だよ！ 魔法の発動した後は、草木一本残らないからね！」

「いやそれ、ヒーリングじゃないし！」

「竜族の将軍も、三つ首の魔狼族も、全員、フリルとリボンに包まれるんだ。その状態での殲滅^{せんめつ}魔法は、敵対する人族の王国や軍に、多大なる脅威として認識されたよ！」

「えうわああ……もはやどこに、どう突っ込めば良いのかわからない」

「そんなものすごい魔術を使えるんだから、異界の戦士達ってすごいよね！」

「いや、あたしらフツーにフツーの人間だから！ そんなものすごい魔法使える人間とか、いないから！」

「またまた。この間も、竜族の若長が、修行しながら言ってたよ。『むう、……まだだ。まだ、それがしは、セエ・ラア・ジュピトア

ーの域に達してはおらん！ 武人なれば、あの御仁の域にまで到達せねば！』ってね。

武人たちには、いつか異界に渡ってセエ・ラア戦士に試合を挑みたいと願っているものは大勢いるよ！

異界との扉が行き来自由になったら、きっと、力自慢の武人が殺到するだろうな……」

「それ、下手したら侵略……」

「そういう人たちの後押しもあって、帰還のための魔道術の研究は、着々と進んでいるからね。必ず君の住んでいた異界に道をつなげるから、安心してね、透子ちゃん」

「は、浜野さああああん！」

魔族の少年少女に大人気の冒険ものらしいのだが、聞けば聞くほど心臓に悪かった。

※ ※ ※

感想で、異世界バージョンのドラゴンボールはどうなるの、と言われたので書いてみました。

ちなみに、返信に書いたのは以下の文章。

『異世界版ドラゴンボール。』

魔王の力が七つの魔水晶となり、世界に飛び散った！

『魔王さまが、半分に縮んでる〜！』『集めて、元に戻さねえと！』

勇敢な魔族の少年少女たちが、人間の国に潜入する。そこで出会う、裏切りと宿命。

『オラ、人間にだって、優しい人はいるって信じてる！』

そんなゴクウは、カメハメハの力により、セーラー戦士の一人となる！

『カメハメハに代わって、おしおきだ！』

敵か味方か。電撃を放つ黄色いネズミ。

『よせ！ オラ、お前とは戦いたくない』『……ピッカー！』

戦いは、何を生み出すのか。魔王は縮んだままなのか。そしてバナナは、おやつに入るのか。

冒険が今、始まる。手に入れろ、魔王の球。

こんな感じ？』

尋ねました。2

魔改造されたドラゴンボールにおののいてしまったが、別の話は
どうなんだという気がして、他の魔族の人にも尋ねてみた。

「ワカメちゃん。ちょっと尋ねたいことがあるんだけど」

「なにかな？」

「異世界の物語って、聞いてたりする？」

「おお、それはもちろん。我らの幼い頃には、子ども同士が出逢えば『魔王の珠』の話をしていたからな」

「魔界で大はやりだったんだ、ドラゴンボール……ええと、ワカメちゃんの聞いたのは、それだけ？」

「他にも色々聞いたぞ。私の好きだったものは、『リボンの軍師』
だな！」

「リボンの……？（なんだろう）」

「うむ。小国の王女として生まれたサファイヤ姫の物語だが」

「あ、『リボンの騎士』」

「悪辣な人間の呪術師の手により、呪詛を受けて育ってしまう。王位継承者たる王女でありながら、継承権のない王子の体のされてし

まうのだ！」

「あゝ……こっちじゃ、女性に継承権があるんですか」

「うむ。魔族は基本、女性が能力や形質を受け継ぐのでな。男が王位を継ぐのは稀だ」

「そうなんだ……じゃあ、タラちゃんは珍しい例なんですね」

「タラチは魔王であつた姉上に、『婿どのと、まったり過ごしたい！』と叫ばれ、王位を押し付けられたからな」

「そんな理由で魔王に。ってか、そんな理由で退位って」

「なに、われらも支えているゆえ、大丈夫だ。トオコも気兼ねなく嫁いで来い！」

「いや、あわ、えう！？ ええええ、えっと、そう、『リボンの軍師』！ それってどんな話だったんですか！？（あせあせ）」

「おお。あれは素晴らしい物語であつたぞ。呪いを受けたサファイヤ姫は、国中から、素晴らしい姫君として称えられていたのだが。しかし、その体は男」

「なんか、方向性が違う話になつてるような」

「秘密がばれ、命の危機に！ しかし姫は、からくもこの危機を逃れる。そうして名を変え、姿を変え、姫は魔王の元で軍師となり。祖国にはびこる悪を倒さんと、日々己れを磨くのであつた……」

「おお。なんかカッコイイ」

「そうだろう。子ども心に痺れたものだ。そして、あの決めゼリフ……『たったひとつの真実見抜く、見た目は男、頭脳は女、その名は、リボンの軍師!』」

「ちょっと待てええ!」

「各地の謎を解き、呪詛を払う、『リボンの軍師』! その行く手を時にはばみ、時に味方となる、怪盗キッド!」

「コナンか。やっぱりコナンなのか!」

「二人の争いとラブロマンスに、魔族の少女たちは熱狂した」

「何を言えば良いんだろう、あたし」

「男である軍師に恋をしてしまったキッドの苦悩も、少女たちに受けていた」

「うを。魔族にも腐女子存在の予感が」

「そうして二人の真実の愛が、魔王陛下に認められ。呪詛が解け、サファイヤは真実、女性に! 二人はサファイヤの祖国に戻り、王位を継いだサファイヤは、男であっても王位継承は可能という法を制定した。キッドは王婿おうせいとなり、サファイヤを終生支えた……という物語だ。

実際、小国では、男に継承権を認めない所もある。が、この物語が流行ったあと、各地で男性に継承権を認めようという動きが起きてな」

「へー……」

「タラチもその流れで、すんなりと王位を継げた。

今思えば、この物語は、シュウゴどのがタラチを魔王にするために、お膳立てとして流したものだたのかもしれない。これがなければ、タラチはどこぞの王家の婿として、この地を離れる運命にあっただろう。その場合、わが甥が長く生きられたかどうかは微妙だ」

「そう……なんですか？」

「うむ。あれは魔族としては、体が弱くてな。今でこそ健康になっ
てはいるが。他の魔族のテリトリーに行けば、適応したとしても、
それだけで力を使い果たしたやもしれん。

その儂さゆえ、一時、タラチは、『亜麻色の髪の王子』と呼ばれ
ていた」

「なぜ亜麻色」

「『リボンの軍師』が亜麻色のカツラをかぶり、村の祭りに参加し、
正体を知らない怪盗キッドと、一騎打ちをしたからだ！」

「なぜ一騎打ち!？」

「知らんのか? 女が男を打ち負かし、肩にかついで家に連れ帰る
のは、伝統的な求婚の作法ではないか」

「どんな作法それ! しかも求婚!？」

「キッドに心奪われたサファイヤ姫は、一騎打ちを申し込む。しか

し呪いの力で男になっていた彼女には、力を発揮することができず。
あわや負けてしまう、という時、

キッドはわざと、姫に負けてやるのだ！」

「おお」

「『儚き君よ。力においては、僕の勝ちだろう。だが、僕の心は既に、君に敗北している』」

「うをゝ……」

「『君は光、僕は影』」

「うをい!？」

「そうしてキッドはわざと敗北、姫の忠実な配下となり。革命の嵐を姫と共に駆け抜ける……!」

「途中から『ベルサイユのばら』になってるよ!？」

「と、いうわけで、『亜麻色の王子』というのは、魔界では儚さの代名詞！ タラチは今でも、グロウガリアスの美貌の王として人気が高い。」

そのタラチを射止めたトオコは、どれほどの女傑かと、大いに噂になっておるぞ！ タラチに求婚した話も、あっという間に広まった。実にロマンチックだと大人気だ。

おお、心配するでない。かように可愛らしいトオコに、決闘などの無粋なマネはさせぬ。文句を言う者は、われらがきっちり、血祭りにあげてやるからな！ 心置きなく、タラチの嫁になれ！」

「ほ、ほへええええ!？」

なぜだろう。どんどん外堀が埋められている気がする。

※ ※ ※

浜野さんは最初、コナンの話をしようとしたのですが、魔族には変身能力を持つ種族がナチュラルにいたため、『体は子供、頭脳は大人』という、例のフリーズが使えなかったのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1044ba/>

勇者と魔王SS～活動報告小話集2～

2012年1月14日21時46分発行